会員のひろば

題字：倉林　順一

海を渡った スダジイ楽書会作品

ぐんま教育文化フォーラムのスダジイ楽書会では、須田先生のご指導と仲間の皆さんの作品に、いつも刺激を頂いています。

以前、少し教室に通っていたお手本を見ながら上手く書く「臨書」の学びとは違い、上手く書こうという考えを捨て、書で自己表現のできる面白さ、そして難しさを深く学べることが、このスダジイ「楽書会」ならではの大きな魅力です。

昨春のこと、米国アリゾナに住む長女のエイムズ唯子から、自宅に建てた茶室の入口に、扁額を掛けたいので、私に文字を書いて欲しいとリクエストが来ました。

「本当に私の文字でいいの？」と聞くと、「お母さんの書がいいのよ」とのこと、ではチャレンジしてみようと、スダジイで見て頂きながら、かなり練習を重ねました。

「久斗庵」という庵号の文字は、小さな茶室のキュートと、エイムズ夫妻が大好きだった亡き祖母(私の母)の久子の文字からとったとのことです。

扁額は、彼らが日本に帰国した際、扁額の専門店にて、ケヤキの分厚い一枚板を用意していただき、職人の方が彫って造ったものでした。

肝心の文字は、文字の構成、表現が難しく私には、大変ハードルの高いものでした。最終的に夫のクリスが、「これがいい」と選んだのは、偶然にも私自身が気に入っていたものと同じで、彼の象形文字のような解釈が新鮮に感じられ、それに決めました。

後に、実際に掛かっている扁額を、アリゾナへ旅し、現地で見て、面映ゆいような、嬉しいような気持ちになりました。

スダジイの学びの場が、こういう形で生かされたことに、心から感謝しております。

（高崎市）小貫紘子

宇宙船地球号の知られざる宝

ボクトウガという蛾は、橡や小楢の幹に卵を産む。孵った幼虫は樹皮を齧って穴をあけ、中の材部も齧って部屋を作る。木は樹液を出して身を守る。皮肉にも、これが発酵して更に虫を招く。当然、ボクトウガも液を食物にしている、とずっと思われてきた。しかし、彼は甘い液に群がる虫たちを強力な顎でひきづりこみ食べていたのだ。これを最近発見したのが、香川大学の市川俊英氏。日高敏隆著「セミ達と温暖化」に紹介されている。

両氏の探究心にも恐れ入るが、蛾の習性には感動する。まき餌をして集まる魚を釣る漁師と同じことを、何万年（？）前から蛾がやっている。

月に宇宙戦争の為の軍隊を置こうというアホな独裁者がいる一方、営々と自然の神秘に瞳を凝らす人もいる。宇宙船地球号には、知られざる宝がワンサと積み込まれている。

（高崎市）金井秀行